

鳥羽離宮

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



12世紀中ごろの鳥羽離宮金剛心院を南西から見た想像図 『図説 京都府の歴史』河出書房新社1994年より転載

鳥羽離宮跡は京都市伏見区竹田・中島の両地区に位置する平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。当時、鴨川は竹田の東側を流れて下鳥羽の南で桂川と合流していた。その合流付近から平安京の羅城門まで「鳥羽の作道」が伸び、水陸交通の要所でもあった。現在、その跡には幹線道路が走り、碁盤の目のように区画整理された道路に沿って倉庫やホテルなどが建ち

並び、もはや、ここが平安時代には和歌に詠まれるほどの景勝地であったとは誰も想像することができない。今では、白河天皇陵・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵や離宮のある城南宮・安楽寿院・北向山不動院・秋の山が点在しているにすぎない。

鳥羽離宮の造営は、白河天皇によって応徳三年(1086)七月頃から始められた。当時の人々の目に

はそれが遷都のように写ったことが「さながら都遷りのごとし」と『扶桑略記』には書かれている。それは新たな政治の流れの始まりを民衆に思い起こさせたに違いない。予感は的中し、その年の十一月、白河天皇は堀河天皇に譲位してみずからは上皇となって政治の実権を握ったのである。天皇に代わって上皇(院)が政治の中心になる院政の幕開けであった。

白河上皇が初めて離宮に出向いたのは造営開始から一年後の寛治元年（1087）七月のことであり、造営がいかに急ピッチで進められたかがわかる。御所や御堂は次々に建立し供養されたが、造営の費用は上皇みずからが負担したのではなく、院政を経済的な面から支えた受領（国司）たちが上皇に献上したものであった。白河法皇（上皇が出家すると法皇となる）の死後は鳥羽上皇が造営を引き継ぎ、開始から約70年も継続したのである。このように、鳥羽離宮跡は院政と密接に関係した遺跡である。

では、離宮の様子を発掘調査の成果を踏まえて詳しく眺めてみよう。この離宮の特色の一つは、池をふんだんに使った庭園にある。造営以前から敷地内にあった大きな池や沼を苑池として巧みに利用し、必要な場所には人工的に池をつくった。上皇や天皇が離宮内で過ごす生活の場である御所（南殿・北殿・東殿・泉殿・田中殿）や、多くの仏像を納めた御堂（証金剛院・勝光明院・成菩提院・安楽寿院・金剛心院）などはいずれも池の近くに建てられている。その破格な規模の苑池は、庭園として鑑賞するだけでなく舟遊びにも利用され、時には御所の間の行き来や御堂の巡礼などにも使用された。離宮内には証金剛院をはじめとしていくつかの御堂が建てられたが、それはほぼ同時期に白河に造られた六勝寺などとは建物の配置が異なっており、その様子も大きく違っていた。

発掘調査（鳥羽離宮跡第97次調



西から見た金剛心院跡と現在の周辺の史跡

査他・伏見区竹田小屋ノ内町他）によって実態が明らかになった金剛心院跡から、院内の特徴を探ってみよう。金剛心院は仁平三年（1153）から造営が始められ、翌年には完成している。1982年から実施した調査では、境内のほぼ中央には釈迦堂、その西では九躰阿弥陀堂が、またその間には小寝殿と考えられる建物の跡がそれぞれ確認された。これらの主な建物は軟弱な地盤に建てられたために、基礎となる工事にはたいへんな手間がかけられていた。釈迦堂の東には池に面して釣殿廊が建てられ、南には船着き場なども見られた。

そして対岸には高さ1mほどの滝がつくられていた。また、九躰阿弥陀堂の前の池には橋が架けられていたこともわかった。こうした境内の風景は、御堂・寝殿・庭園が一体となった鳥羽法皇だけの極楽浄土であり庶民には想像もできない別世界であったに違いない。

二代の上皇（法皇）がこよなく愛した鳥羽離宮も、鳥羽法皇の死後は幾度か修理はされたものの、しだいに訪れる人も少なくなり、鎌倉時代の末頃からは荒廃が始まっていつしか地上からその姿が消え去ってしまった。

（鈴木久男）